

<第2分科会>

「体験を通じた問題解決的な学習」

提案者 周南市立秋月小学校 教諭 八木 伸江

1 発表要旨

「生活の中から課題を見付け、家族への思いを実現させる家庭科の授業」

～第6学年「まかせてね！きょうのお弁当」の
実践～

(1) 研究の概要

① 家庭科における問題解決的な学習のとらえ方

子どもがふだんの家庭生活の中から課題を発見し、学校で主体的に学習を深め、その中で身に付けた知識や技能をもう一度家庭で生かしていく。家庭と学校が相互に関連し合うことが、問題解決的な学習において大切である。

② 子どもの実態に合わせた指導計画

食事に関するアンケートの結果から、「家族」に思いを寄せ、家族の一員であることが実感できる活動を中心にすえて指導することにした。また、子どもたちの実態から、まず、基礎的な力を身に付け、その後、個別課題での学習を進めることにした。

③ 主体的に学ぶ意欲を高める体験的な活動

ア 繰り返し家族にインタビューする。
イ 子どもにとってより身近な題材を選ぶ。
ウ 実習計画、買い物、調理実習を一連の流れとして結び付け、見通しをもって体験的な活動ができるようにする。

④ 個を生かすグループ作り

一人一人が自分なりの課題をもち、その上で、同じような課題意識をもっている児童同士でグループを作り、アイデアを出し合い練り上げていく。

⑤ 家庭との連携

ア 家族へのインタビューカード
イ 学級通信

(2) 研究の実際

「まかせてね！きょうのお弁当」の実践紹介
「お弁当」は栄養バランスが一目で分かりやすい上、家族への思いが反映されやすい。「お弁当」という一つの世界を設定することで、子どもたちがイメージしやすくなり、家族を思い描いて学習を進めていくことができると考えた。

(3) 研究の成果

・「家族のためにどんなお弁当を作ればよい

か」という課題を通して、基礎的な知識を必要感をもって学習することができた。

・常に家族の人とのつながりをもちながら活動を進めてきたため、家族の一員としての自覚が高まった。思いやりの気持ちをもって家族を見つめることができるようになった。

2 研究協議

質問 買い物をする際1人300円は高いと思う。どういう考えで金額を決めたのか？

答え 同学年の先生と相談して、だいたい300円くらいと決めた。結果的には1人200円からなかった班もある。

質問 300円の中から調味料も買うのか？

答え お米と調味料は持ってくることにした。買い物の仕方にも勉強になった。5個入りのりんごのほうが安いけれど、これだけ買っても足りないから1個にしよう、など。

質問 一人一人のこだわりを生かしたお弁当作りという点で、どのような配慮をしたのか？

答え おかず自体はグループで同じものを作るが、子どもたちが考えたのは切り方。ピーマンを細かくきざむとか、食べやすいようにおにぎりを小さくするとか。お弁当箱も家から持ってくるが、相手をイメージした物を選ぶ時点でこだわりが見られた。

司会 「1食分のおかずの授業」で、他に方法や実践例があれば情報交換をしたい。お弁当作りに結び付けた学校は？

○ 1学期が朝食だったので、2学期は昼食の代わりになるということでお弁当を作った。見た目はきれいにできたが、技能が身に付いていなかったことが問題。小学校の間は基礎・基本を身に付けることが大事。

○ 今回2度実習をしている。1度目は大変だったが、そこで身に付いた技能があったからお弁当作りではできそうだという見通しがもてた。

○ 技能は日常積み重ねることで身に付いていく。卵のゆで方一つにしても、家庭環境によって違う。実習はとても大切だと思う。実習の前に一度家庭で作ってごらんと投げかける。それが次の実習に結び付く。技術は一度や二度では身に付かないので、家庭の協力はとても大切。

司会 提案者は、インタビューカードやメッセージカードで保護者の意識を高めてもらう、協力をいただくという実践だったが、保護

者の協力をいただいた実践があれば…。

- 栄養バランスを考える課題としてお弁当作りをした。子どもは意欲的に取り組むが、技術面で差があるので自分の力でやっただと、人にやってもらった子とに分かれる。自分でできる子は次の課題をもつことができるので、家庭との連携は大切。初めての調理の時は「家でおばあちゃんと練習した。またやってみよう」と感想を書いている。家庭から学校に、そしてまた家庭に戻っていくという連携のあり方が理想的。

司会 提案者の持参資料を見ながら、気付きをお願いしたい。

- バイキングカードについては、養護教諭が作成したもの。全員がそれぞれのおかずを取ってもよいよう30枚ずつ用意してある。バランスを考えて、献立を見直していくのに、大変役に立った。

司会 今回時間数を多くとって取り組んだことが、自然の流れで3学期の学習に結び付く。今日の提案授業も目的をもった野菜炒め作りでよく考えられていた。何のための勉強なのか、目的をはっきりさせ、離れないようにすることが大切だと思う。

3 指導助言

周南市立遠石小学校 教頭 池本 順子

現代の子どもの食生活を“ニワトリ症候群”という。一人で食べている（孤食）朝食を食べない（欠食）家族がバラバラのものを食べる（個食）うどん・パスタなどを好んで食べる（小麦粉）これで“コケッコ”という。問題なのは子どもの心を育てる場である「食卓」が崩壊してきているということ。特に深刻なのは孤食と欠食による栄養の偏りである。理由として、頭ではわかっているが忙しいということがあげられる。食生活を日々考えていくことは大変なことだ。

5年生の授業の経験から、ゆで卵をゆでる際、“沸騰”が分からない子どもたち、野菜をゆでる時“水きり”の方法が分からない子どもたちがいる。子どもは生活経験がないから分からない。でも、教えればできる。それも1回より2回、2回より3回と繰り返し実施していく中で身に付けてくる。積極的に家族を巻き込み、家庭生活→学校での体験→家庭での実践が大切である。実践に結び付けるのは「やってみよう」という意欲である。「できた」→「やってみた」→「ほめられた」→「またやってみよう」こうした体験の積み重ねが

意欲の原動力につながる。

提案者の実践は現代の食生活とか家族の問題に真正面から取り組んでいる。

子どもたちに健全な食生活ができるようにする手だてとして、例えば調理の時、1回目は栄養バランスを考えた献立を、2回目にはお弁当作り、おかずを作ってもいろんな条件がでてくる。そういう時に先生の作ったお弁当を見せるとか、グループで学習しても自分のこだわりを生かすとか、いろいろな「仕掛け」を先生がもっていると、それがレベルアップにつながる。

<課題作りについて>

今日は、お弁当作りを「家族の〇〇のために」としぼり込んでいたが、しぼり込むことで子どもたちは家族の生活と食生活の実態をしっかり見つめる。例えば歯が悪いおばあちゃんにも食べやすい食事を作るにはどんな献立にしたらよいかなど。家族や生活に密着した課題ほど必要感をもつ。ゴールが見えるので実際に課題を解決していく中で、「できた」という実感がもてる。そうすると家庭での実践の意欲につながる。

<繰り返し学習について>

2回の調理実習は、子どもの技術的な力を伸ばしていくとか、家族を見つめる目を広げる意味でも、ぜひ取り組んでほしい。1回目の実習は上手いかな。それを「だめだったね」ではなく「いいことに気付いたね。ここで気をつけたら今度は上手いくね」というように、新しい課題に結び付くような投げかけを先生の方からしてほしい。

<グループと個について>

個から始まった家庭科学習がグループの学習になると個が埋もれるのではないかという心配があるが、今の食卓の貧しさを考えると、グループのもつ意味は大きい。みんなで話し合ったときにいろいろなことを学び合ったり、コミュニケーション能力を育てたりできる。そして、いろいろな家族の多様性に気付き、自分の生活を振り返ってみて、家でやってみようかなと思う。こうしたことが実践に結び付く活動となり、生活をよりよくしていく。今回は家族に積極的に関わらせると同時に、家族にも積極的に協力してもらっている。家庭科は家庭生活が基盤となる。今度の新学習指導要領では、小・中・高の系統性に重きをおくので、生活習慣を育む中で、長い時間をかけて身に付けていけるのではないか。先生が楽しいと思えば子どもも楽しいと思う。私自身がいつもそう信じてやっている。